

日本列島先史・原史時代における戦いと戦争のプロセス

松木 武彦*

日本列島中央部（九州・四国・本州）の先史時代および原史時代を対象に、戦いに関連する考古学的エヴィデンスを2大別23項目に整理し、時系列的に並べて消長をみた。その結果、戦いのプロセスに4つの画期が認められた。紀元前900年代の弥生時代開始に伴う第1の画期では、情報としての暴力文化複合が、水稻農耕とともに朝鮮半島から伝わった。弥生時代中期に入る紀元前400年頃の第2の画期では、金属器経済の浸透や人口の増加に伴う社会環境の変化を引き金として暴力文化複合が活性化し、戦闘の頻発や、戦いに関わる表象の物質化が進み、それが個人の威信や集団のアイデンティティと結びついて社会の変化を促進した。第3の画期は紀元後250年の古墳時代への移行で、戦いに関わる表象は個人の威信と結びつくことに特化し、古墳祭祀を媒体として有力層の威信形成を推進した。飛鳥時代が始まる紀元後600年頃の第4の画期では、戦いに関わる表象は国家支配のイデオロギーに吸収され、国家の確立を助けた。

キーワード

日本列島先史時代、日本列島原史時代、弥生時代、古墳時代、戦争

目次

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| I 本稿の目的 | 3 弥生時代前期／弥生時代中期の画期 |
| II 戦いの考古学的エヴィデンス | 4 弥生時代後期／古墳時代前期の画期 |
| 1 佐原真による6項目の提示 | 5 古墳時代後期／飛鳥時代の画期 |
| 2 戦争の定義とエヴィデンスの再設定 | IV 日本列島における戦いと戦争のプロセスと背景 |
| III 日本列島における戦いと戦争の経緯 | |
| 1 考察の対象と方法 | |
| 2 縄文時代晩期／弥生時代早期の画期 | |

I 本稿の目的

日本列島の先史時代および原史時代における戦いと社会についての考古学的研究は、1950年代に本格化した。1953年と1964年にそれぞれ出版された2つの高地性集落の報告書『島田川』（小野（編）1953）と『紫雲出』（詫間町文化財保護委員会（編）1964）は、弥生時代後半期の遺構や遺物に戦いの痕跡を見出し、日本や中国の歴史書に現れる戦いの記事をそれに結び

つけた。

後者の報告書を主導した佐原真は、1980年代以降、戦いと社会についての考古学的研究をより普遍化するために、戦いの考古学的証拠を次のように規定した。A 守りの村、B 武器、C 殺傷（されたあとを留める）人骨、D 武器の副葬、E 武器形祭器、F 戦士・戦争場面の造形（佐原 1999）。

これを踏まえて世界の事例や研究成果を概観した佐原は、「人類は、食料採集の段階において人を殺すこ

* 国立歴史民俗博物館／総合研究大学院大学

とはあった。しかし、巨視的にみれば農耕社会とともに戦いが始まった」「食料採集段階に戦いの始まりを認める立場に立った場合にも、農耕社会に入ることによって戦いが変質し本格化したことは否めない」とし、食料採集すなわち農耕の開始と戦いの始まりとの間に因果関係があることを指摘した（佐原 2005: 10）。日本列島においては、縄文時代にも暴力が存在したことを認めながら、本格的に戦いが始まったのは弥生時代とした。

佐原の研究、とくに戦いの考古学的エヴィデンスの提示をもとにして、その後は弥生時代の戦いの過程を探る研究が続いた。武器や守りの村、殺傷人骨や武器の副葬などの戦いの証拠の多くは弥生時代初頭に水稲農耕とともに朝鮮半島からもたらされたこと（藤尾 1996）、武器の地域色の変化からみて戦いは局地的なものから広域的なものへと拡大したこと（松木 1995）などが主張された。殺傷人骨から戦いの様態や社会的背景に迫る研究（橋口 1987、中橋 1993、藤尾 1996、藤原 2004、Nakagawa et al. 2017、Nakao et al. 2016）も続いた。

これに対して、弥生時代に続く古墳時代の戦いは、古墳に副葬された武器やその副葬の方式などが、ほぼ唯一の分析対象となった。武器の副葬は儀礼の痕跡であるというコンテキストがあまり重視されることなく、武器そのものの機能的な復元や製作技術の研究が突出して深化した。いっぽう、有力層が副葬という形で武器を占有する状態を、古典的な国家形成論という軍事組織と結びつける論点もみられた（松木 1991）。武器やその副葬以外の戦いのエヴィデンスについての検討は、その少なさとあいまってあまり進まず、殺傷人骨の集成や解釈がおこなわれたのもようやく近年のことである（藤原 2004）。

このように、日本列島の戦いの研究は、1980年代の佐原の仕事よりこのかた、時代や側面を限った資料の分析や解釈については一定の成果がみられる。しかし、それらを統合し、先史時代の狩猟採集段階から農耕社会の階層化を経て国家形成にいたる長期的視座の中に、各時代の戦いのエヴィデンスを位置づけ、それをもとにして戦いの発生や展開とその歴史的背景を大きく論じた研究はほとんどない¹。

本稿は、戦いの考古学的なエヴィデンスが出現する

弥生時代から、国家が確立する奈良時代までの約1,600年間の日本列島を対象として、エヴィデンスの消長や増減を一貫した視点で整理しなおし、戦いの発生や展開の長期的プロセスを明らかにして、その特質や背景に迫ることを目的とする。

II 戦いの考古学的エヴィデンス

1 佐原真による6項目の提示

戦いの考古学的エヴィデンスを、佐原がもっとも詳細に記述しているのは1999年の「日本・世界の戦争の起源」（佐原 1999）である。ここでは、以下のような6項目による分類がなされている。

A 守りの村＝防禦集落（町・都市）

A1 高地集落 A2 環壕集落 A3 守りの壁＝防壁 A4 守りの壕（濠） A5 守りの柵＝防禦柵 A6 逆茂木 A7 のろし A8 出入口の防禦的構造 A9 出入口付近の戦いのあと A10 村の破壊・火事

B 武器

B1 遠距離武器と近距離武器 B2 武器の折損と再生 B3 守りの武器・武具（盾・よろい・かぶと）

C 殺傷（されたあとを留める）人骨

D 武器の副葬＝遺体に副えて武器を葬る

E 武器形祭器＝武器の形を模した祭り・儀式的道具

F 戦士・戦争場面の造形

以上のような佐原によるエヴィデンスの提示は、単なる行為としての暴力から、暴力の象徴的表現まで、戦いのさまざまな位相の物質的痕跡を集積したものである。佐原は、これらの指標が原則として農耕社会に現れるという認識から、農耕が戦争の要因になったと結論づけ、日本列島においては弥生時代が戦争発生段階にあたることを主張した。ただし、それぞれのエヴィデンスが戦いのどのような位相や局面を反映するかという整理は、そこでは徹底されず、それをもとにして戦いの形態や質の具体的な推移をつかむ具体的作業は後進に委ねられた。

¹ 松木武彦 2007『日本列島の戦争と初期国家形成』は、弥生時代から古墳時代までを通じた戦いと戦争のプロセスを対象としているが、本稿のような一貫した視点は意識されていない。

2 戦争の定義とエヴィデンスの再設定

本稿での考察の前提として、戦いのエヴィデンスのそれぞれが、戦いのどのような位相や局面の痕跡であるかを確認しておきたい。その際に怠れないのは、戦いと「戦争」とをどのように認識し、とりわけ後者をいかに定義するかという問題であろう。戦争とは、一般に、集団間の大規模で組織的な戦いとされ、戦いの究極的な発展形態として理解される。

戦いは、多くの生物種の間にも広く認められる現象であるが、戦争は、ヒトという生物種のみにも固有に現れた行動や認知の様式である。そのことを明らかにするために、生物学的にヒトにもっとも近い生物種であるチンパンジーの戦いをみておこう。チンパンジーの集団は20～100頭からなる父系の集団で、オス同士は血縁、メスは繁殖可能な年齢になって他の集団から移入してくる。集団は離合集散もするいっぽう、それぞれテリトリーを占有して食料資源やメスを囲い込み、それをめぐって隣接集団との間に緊張関係をもちやすい。オスは隊列を組んでテリトリーの周縁をパトロールし、その際などに隣接集団のオスとの間で暴力が行使される。そこで犠牲者が出る場合は少なくなく、極端な場合は優勢な集団が劣勢の集団を消滅にまで至る場合があるという(ランガム&ピーターソン 1998)。

ただ、同じ集団のオス同士には、父子・兄弟・従兄弟などの比較的濃い血縁関係があるので、もしある個体が集団間暴力で命を落としたとしても、彼の遺伝子の多くは、生き残る同集団のオスに受け継がれて次世代に伝えられる。これは古典的な「包括適応度」(Hamilton 1964)の概念に照らす限り生物学的には合理的とされ、利他性(他者のために自分を犠牲とする心や身体志向)の生物学的起源を説明する1つの仮説として評価される。これに対して、ヒトの戦争、たとえば国家間の戦いにおいては、そこで命を落とす引き換えに守られる遺伝子のほとんどあるいは全部は、命を落とす個体の遺伝子ではないことになり、生物学的には不合理である。

このような生物学的不合理を超え、膨大な数の個体を生命と引き換えに集団間暴力に参加させるためには、包括適応度に根ざした本源的で無意識的な利他性を、意識され言説化される利他性へと発展させることによって各個体が自身の落命を心理的に「合理化」するための文化的装置が必要である。本稿では、このような個体の認知(感情や認識)に訴えつつ、その身体を集団間暴力の場へと動員する種々の文化的装置を

「暴力文化複合」と称し、それが発動した状態を「戦争」と定義することにしたい。

したがって、戦争のエヴィデンスは、実際におこなわれた集団間暴力という「行為の痕跡」と、暴力文化複合が発動した痕跡との両者から構成される。そして、前者の行為の痕跡は、それがヒトそのものに残された結果である「受傷遺体」と、その際に「使用された武器」に残されたものからなる。また、後者の暴力文化複合の痕跡は、個体を集団的暴力へと動員する心理的動機として働く「表象の痕跡」と、実際に動員された結果である「組織化の痕跡」とから構成される。「表象」とは、認知科学における「心に思い浮かべることのできるひとかたまりのイメージや概念」のことで、利他性に根ざした自己犠牲的な行動を促す感情や認識を喚起する表象(所属する集団のアイデンティティ、他集団への敵対感情、闘争の先頭に立つ勇敢さや英雄性や残虐性を帯びたパーソナリティの威信、闘争行為そのものの聖化など)が物質化されて世界に布置されたものが「表象の痕跡」である。以上を踏まえ、佐原が示したエヴィデンス群(佐原 1999)を次のように再構成したい。

A 行為の痕跡

1. 受傷遺体

- ①埋葬された受傷遺体 ②遺棄された受傷遺体 ③遺棄された多量の受傷遺体(大量虐殺) ④戦争奴隷の埋葬

2. 使用された武器

- ①遺骸および防御具や防御施設への嵌入 ②武器の折損・再生痕 ③武器の散乱(戦場)

B 暴力文化複合の痕跡

a 表象化の痕跡

1. 内外の表象

- ①村落の囲郭 ②邸宅の囲郭 ③城市 ④砦・監視施設 ⑤防御線(城壁・柵など)

2. 戦いの表象

- ①特定の武器セット ②象徴化された非実用的武器 ③戦いの描写

3. 戦いのパーソナリティ(勇士・英雄・武威)の表象

- ①武器副葬 ②戦士の造形 ③戦いにかかわる動物のイメージ

b 組織化の痕跡

1. 武装

- ①武器の広域流通 ②武器庫 ③武器工房

2. 戦団

- ①兵営・駐屯地 ②標章

これらのエヴィデンスを時系列で配列した時に、どの段階をもって「戦争」の発生とみなすかという点は議論を要する。Aは「行為の痕跡」であるから、戦争より前の偶発的で非組織的な暴力も含むが、なかでも1-③の「遺棄された多量の受傷遺体」が示す大規模な殺戮の痕跡の背後には、暴力文化複合の営力で組織的に大規模化した闘争、すなわち戦争の存在を推測することが許されよう。とくにその多量の受傷遺体のうちに乳幼児や子供が含まれている場合は、松本直子が注意するように（松本 2018）、アイデンティティを異にして敵対する集団間においてはその成員を無条件で殺戮する行為が表象として正当化されていた事態を示し、戦争の存在を強く示唆する。Bの「暴力文化複合の痕跡」は、それが安定して揃い、維持または強化されることをもって、背後に戦争の存在を主張できる。

III 日本列島における戦いと戦争の経緯

1 考察の対象と方法

以上の2大別23項目にわたる戦いないしは戦争のエヴィデンスについて、日本列島中部の先史～原史時代各時期における消長を示した（表1）。なお、ここでいう日本列島中部とは、表1で対象とした最終の段階である西暦8世紀に「国家」の領域が確立した九州・本州・四国の主要3島とその近縁からなるエリアをさす²。このエリアの空間的な南辺部や北辺部において、空間的に中央寄りの地域とは異なった固有の動きが認められる場合があり、それ自体は重要な事象であるが、本稿では中央寄りに生じた典型的な動きをみて戦いと戦争のプロセスを復元することを主目的とするので、それ以外の動きについては、いずれ機会を改めて考察することとする。また、中央寄りの地域の内部にも細かな地域差があるが、本稿は日本列島以外の世界各地との比較に用いることを念頭に置き、列島内の地域差については別論に委ねることとして、各時期の指標はもっとも早期かつ顕著に表れた地域のそれをもって代表する。

表1 日本列島の先史・原始時代における戦いと戦争のエヴィデンスの消長

時代・期		縄文時代	弥生時代				古墳時代			飛鳥時代	奈良時代	
			早期	前期	中期	後期	前期	中期	後期			
実年代		～BC925	BC925-800	BC800-400	BC400-AD25	AD25-250	250-375	375-500	500-600	600-700	700-800	
A 行為の 痕跡	1. 受傷 遺体	①埋葬された受傷遺体	+	○	○	○	-	+	+	-	-	
		②遺棄された受傷遺体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		③遺棄された多量の受傷遺体	-	-	-	+	-	-	-	-	-	
		④戦争奴隷の埋葬	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	2. 使用さ れた武器	①遺骸および防具や防御施設への 嵌入	-	+	+	○	+	-	-	+	-	-
		②武器の折損・再生痕	-	+	+	○	+	+	+	+	-	-
③武器の散乱		-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	
B-a 表象化 の痕跡	1. 内外の 表象	①村落の囲郭	-	○	○	◎	-	-	-	-	-	
		②邸宅の囲郭	-	-	-	-	+	○	○	○	+	+
		③城市	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+
		④砦・監視施設	-	-	-	+	+	-	-	-	○	○
		⑤防御線	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2. 戦いの 表象	①特定の武器セット	-	○	+	○	○	◎	◎	◎	+	+
		②象徴化された非実用的武器	-	+	+	◎	◎	○	○	○	-	-
		③戦いの描写	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-
	3. 戦いの パーソナ リティの 表象	①武器副葬	-	○	+	○	○	◎	◎	◎	+	-
		②戦士の造形	-	-	-	-	-	-	○	○	-	-
③戦いにかかわる動物のイメージ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
B-b 組織化 の痕跡	1. 武装	①武器の広域流通	-	-	-	+	◎	◎	○	+	+	
		②武器庫	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		③武器工房	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	2. 戦団	①兵営・駐屯地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		②標章	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

² ここでいう中部とは、藤本強が日本列島の歴史文化について「北の文化」「南の文化」に対置した「中の文化」の領域に相当するものである（藤本 1988）。

表1では、各項目のエヴィデンスの存在が確認されるものを+、エヴィデンスの数がおよそ100年間で10以上または母数の1割以上(たとえば武器副葬であれば、総副葬数の1割以上において武器副葬がみられること)といった普遍性をもつ場合を○、それらが質量ともにさらに顕著で時期の歴史的特徴をなすよう

な場合を◎としている。その配列をみると、日本列島の戦いおよび戦争の生成・発展・持続・変容のプロセスには、4つの画期がうかがえる。以下、年代を追ってそれらを詳述する。なお、それぞれの時期の各項目のエヴィデンスについての代表例や判断事由などは、そのつど本文に記すとともに表2に補った。

表2 エヴィデンスの内容 (エヴィデンスの項目記号番号は表1と共通)

エヴィデンス	時代・期	評定	評定の根拠となる事例および備考	参考文献など (原報告ではない)			
1	①埋葬された受傷遺体	縄文時代	+	全期間を通じての例数は2013年の内野那奈の集計で17例、2017年のNakagawaらの集計では23例。受傷遺体/全遺体の比は0.89%	内野 2013、Nakagawa et al. 2017		
		弥生時代早期	○	2017年のNakagawaらの集計では6例、受傷遺体/全遺体の比は22.22%、期間継続年数約150年、ただし九州北部に集中	Nakagawa et al. 2017		
		” 前期	○	2017年のNakagawaらの集計では7例、受傷遺体/全遺体の比は3.00%、期間継続年数約400年、ただし九州北部に集中	Nakagawa et al. 2017		
		” 中期	○	2017年のNakagawaらの集計で70例、受傷遺体/全遺体の比2.98%、期間継続年数約400年、九州北部に集中、近畿にも散在	Nakagawa et al. 2017		
		” 後期	○	2017年のNakagawaらの集計では17例、受傷遺体/全遺体の比は2.46%、期間継続年数約250年、九州北部に集中	Nakagawa et al. 2017		
		古墳時代中期	+	2013年の藤原哲の集成では9例、うち7例は九州南部の地下式横穴墓の出土例、それ以外は2例、地域的に偏在か。受傷遺体/全遺体の比は1%以下	藤原 2013		
		古墳時代後期	+	2013年の藤原哲の集成では4例、うち1例は九州南部の地下式横穴墓の出土例、受傷遺体/全遺体の比は1%以下	藤原 2013		
3	③遺棄された多量の受傷遺体	弥生時代後期	+	鳥取市青谷上寺地遺跡で、少なくとも109体分の人骨が廃棄され、うち10数人分に受傷痕あり	鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター(編) 2002		
A	①遺骸および防具や防衛施設への嵌入	弥生時代早期	+	福岡県糸島市新町遺跡24号墓(磨製石鏃)	橋口 1995		
		” 前期	+	可能性として、福岡県大野城市中・寺尾遺跡II区8号木棺墓(磨製石剣切先)、および兵庫県神戸市新方遺跡(打製石鏃)等	橋口 1995、松木 2000		
		” 中期	○	福岡県飯塚市スダレ遺跡3号壟棺墓(磨製石剣切先)、筑紫野市永岡遺跡K95(銅剣切先)・K100(磨製石剣切先・銅剣切先)、長崎県平戸市根獅子遺跡2号人骨(銅剣切先)。九州北部に偏在するも、可能性をもつ事例は西日本一円に分布	橋口 1995、松木 2000		
		” 後期	+	佐賀県吉野ヶ里町三津永田遺跡32号人骨(鉄鏃)	橋口 1995		
		古墳時代後期	+	可能性として、香川県善通寺市王墓山古墳出土の挂甲小札に認められる、片刃式鉄鏃によるとみられる穿孔等	笹川(編) 1992, p. 74		
		2	②武器の折損・再生痕	弥生時代早期	+	福岡県糸島市曲り田遺跡出土柳葉形磨製石鏃等にみられる研ぎ直しと刃部再生による寸詰まり形態。現状では九州北部のみ	橋口 1992
				” 前期	+	福岡県中間市上底井野出土有柄式磨製石剣等にみられる研ぎ直しと刃部再生による寸詰まり形態。現状では九州北部のみ	橋口 1992
” 中期	○			細形銅剣・細形銅剣の折損と研ぎ直しの例は普遍的、ただし北部九州にほぼ限定	橋口 1992		
” 後期	+			鉄剣・鉄刀の目釘孔の位置変更から柄の付け替えが行われたとわかる鉄剣・鉄刀は、弥生後期以降に広い範囲で普遍的にみられ、その際に刃部再生を伴う「磨上げ」が行われることのあった可能性が高い	松木 2007、豊島 2010		
古墳時代前期	+						
” 中期	+						
” 後期	+						
3	③武器の散乱	弥生時代中期	+	滋賀県守山市下之郷遺跡では、折損した石剣・銅剣および石鏃などが集落の入り口付近に散乱。戦闘行為の痕跡か	守山市教育委員会(編) 2017		
B-a	①村落の囲郭	弥生時代早期	○	福岡市那珂遺跡・糟屋町江辻遺跡など、九州北部に限定	中村(編) 2001、藤原 2011 図2		
		” 前期	○	岡山県矢掛町清水谷遺跡・兵庫県神戸市大開遺跡・三重県大谷遺跡など、前期中段階までに九州北部から東海にまで伝播	中村(編) 2001、藤原 2011 図2		
		” 中期	◎	近畿～東海(奈良県田原本町唐古・鍵遺跡、和泉市/泉大津市池上曾根遺跡)で環濠の拡張と多重化。関東では南部を中心に環濠集落が林立、様相の細部は異なるが、列島の広い範囲で環濠集落が発展	中村(編) 2001、藤原 2011		

		〇	佐賀県神埼市/吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡、長崎県壱岐市原の辻遺跡など九州で環濠が大型化。近畿でも和泉市観音寺山遺跡や高槻市古首部・芝谷遺跡などで丘陵上の環濠集落が出現、時期の後半には北陸に大型の高地性環濠集落が展開	森岡 1996、中村（編）2001、藤原 2011
②邸宅の囲郭	弥生時代後期	+	佐賀県基山町千塔山遺跡・福岡市比恵遺跡など、方形を基調とする別区画が集落内部に出現、有力層の邸宅の萌芽的形態か。九州北部を中心とした事象	武末 2002
	古墳時代前期	〇	大分県日田市小迫辻原遺跡、静岡県浜松市大平遺跡、栃木県さくら市四斗蔭遺跡など、列島の広い範囲に散在	橋本博 2012・2013
	〃 中期	〇	奈良県御所市長柄遺跡、群馬県高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡など、斜面に石を貼った濠をもつものが顕在化	橋本博 2012・2013、橋本輝 2013
	〃 後期	〇	奈良市菅原東遺跡・群馬県原の城遺跡など、数は減り始めるが広範囲に展開	橋本博 2012・2013、橋本輝 2013
	飛鳥時代	+	囲郭は濠から溝へと変化して防御性が後退	橋本博 2007
	奈良時代	+	いわゆる「古代豪族居宅」として列島の広範囲に新たに展開	橋本博 2007
③城市	奈良時代	+	飛鳥宮・前期難波宮・藤原宮などが継的に成立	奈良文化財研究所（編）2017
④砦・監視施設	弥生時代中期	+	遺構によって確実に実証されていないが、その立地からみて見張り台としての役割を具備していた可能性がきわめて高い高所立地の集落が、瀬戸内から近畿にかけての地域を中心に、弥生時代中期後半と後期後半の2度のピークをもって現れる	寺沢 2008 [2000]: 204の分布図 寺沢 2008 [2000]: 238の分布図
	〃 後期	+		
	飛鳥時代	+	北部九州～瀬戸内沿岸の古代山城、「城柵」の遺構として宮城県仙台市郡山遺跡	熊谷 2004
	奈良時代	+	「多賀城」などの古代城柵	
①特定の武器セット	弥生時代早期	〇	朝鮮半島系の磨製石鏃+有柄式磨製石剣、当初は九州北部に限定されるが、次の時期までには瀬戸内にまで伝播	
	〃 前期	+	朝鮮半島系の磨製石鏃+有柄式磨製石剣が形態的に弛緩して規格性が低下。近畿では打製石鏃+打製石剣のセットが萌芽	下條 1986、松木 2007
	〃 中期	〇	九州北部では朝鮮半島から伝わった銅剣・銅矛・銅戈の3種セットが成立。瀬戸内・近畿・東海の各地では打製石鏃+打製石剣が、それぞれ固有の石材と形状を確立	松木 2007
	〃 後期	〇	鉄剣が九州北部から東日本まで普及するとともに、銅鏃の生産がピークとなり、広い範囲で類似した形態をとる	松木 2007
	古墳時代前期	〇	長刀+短剣（ヤリ）に有稜系の鉄鏃あるいは銅鏃が加わったより複雑な武器セットが成立し、広範囲に広がる	松木 2007
	〃 中期	〇	長刀が主流を占め、それに帯金式と呼ばれる規格的な甲冑が加わり、セットとなって広範囲に流通する	小野山（編）1975、松木 2007
	〃 後期	〇	甲冑は減るが、長刀に「長頸式」と呼ばれる実践的な鉄鏃が組み合わさり、馬具が加わったセットが広範囲で認められる	小野山（編）1975、松木 2007
	飛鳥時代	+	古墳の武器副葬そのものが減る中でセット関係は緩まるが、長刀と長頸式鉄鏃の基本セットは維持される	松木 2007
	奈良時代	+	長刀と各種の長頸式鉄鏃を主体とするセットが、正倉院の收藏品などに認められる	松木 2007
	②象徴化された非実用的武器	弥生時代早期	+	朝鮮半島系の磨製石鏃+有柄式磨製石剣の一部に、実用を妨げるほどの精細化（石鏃）や肥大化（石剣把）の兆が窺える
〃 前期		+	当該期間の後半には、朝鮮半島から伝わった銅剣・銅矛・銅戈の3種セットに肥大化して儀器化する予兆が認められる	松木 2007
〃 中期		〇	九州の中細形銅剣・銅矛・銅戈、瀬戸内の平形銅剣、近畿東部の大阪湾型銅戈など、儀器化した武器が地域ごとに定型化	樋口（編）1974、松木 2007
〃 後期		〇	九州を中心として、中広形銅戈・広形銅戈など、肥大化が極みに達した武器形儀器が展開する	樋口（編）1974、松木 2007
古墳時代前期		〇	美しい靱に入った精製銅鏃を装着した飾り矢の束、碧玉製の鏃を装着した儀器としての矢などが出現、広範囲に流通	松木 2007
〃 中期		〇	鉄製甲冑の中には金銅装で歩揺を付けたものなど、明らかに儀仗用の品がある。鉄製甲冑全体にその性格を想定する見解も	松木 2007、橋本達 2020
〃 後期		〇	美麗で実用性の低い装飾付大刀が列島の広範囲を流通	樋口（編）1974、松木 2007
③戦いの描写	弥生時代後期	+	盾と戈をもつ人物のイメージを線刻した土器	設楽 2006
	古墳時代前期	+	伝群馬県高崎市八幡原町狩猟文鏡（実際には武器を手にする人物群を鋳出した鏡）	

3	①武器副葬	弥生時代早期	○	朝鮮半島系の磨製石鏃+有柄式磨製石剣の副葬。九州北部に限定	松木 2007
		” 前期	+	朝鮮半島系の磨製石鏃+有柄式磨製石剣のセットでの副葬は減少。ほぼ九州北部に限定	松木 2007
		” 中期	○	銅剣・銅矛・銅戈の3種セットが、被葬者の地位に応じた本数(多くは1本)と組み合わせて副葬される。九州北部に限定	松木 2007
		” 後期	○	九州北部から東日本にまで鉄剣(まれに鉄刀)の副葬が広がる	松木 2007
		古墳時代前期	◎	長刀+短剣(ヤリ)に有稜系の鉄鏃あるいは銅鏃が加わったより複雑な武器セットが広範囲で副葬される	松木 2007
		” 中期	◎	帯金式甲冑・長刀・鉄鏃のセットが広範囲で副葬される。当該期間の後半には鉄鏃は長頸式となって馬具が加わる	松木 2007
		” 後期	◎	大刀・長頸式鉄鏃・馬具を基本とし、ときに挂甲や広板鋌留冑などが加わった武器のセットが副葬される	松木 2007
		飛鳥時代	+	飾り大刀などが少数副葬される	津野 2011
	②戦士の造形	古墳時代中期	○	着用形態の甲冑形埴輪が出現	一瀬・車崎(編) 2004
		” 後期	○	甲冑を着て大刀を帯びた「武人」を象った人物埴輪が関東を中心に多くみられる	一瀬・車崎(編) 2004
B-b 1	①武器の広域流通	弥生時代後期	+	九州北部から東日本にまで鉄剣・鉄刀が広域に流通	松木 2007
		古墳時代前期	◎	有稜系の鉄鏃は九州北部から関東南部まで同じ形状のものが分布し、広域に流通した可能性	松木 2007
		” 中期	◎	鉄製甲冑は近畿を中心に製作されて広域に流通	松木 2007、橋本達 2020
		” 後期	○	大刀や挂甲は広域流通の可能性	松木 2007
		飛鳥時代	+	大刀などの大型武器は広域流通の可能性	津野 2011、松木 2007
		奈良時代	+	正倉院所蔵の鉄鏃には各地域で製作・献上されたものを含む可能性	津野 2011、松木 2007

2 縄文時代晩期/弥生時代早期の画期

第1は、弥生時代の開始、すなわち縄文時代から弥生時代早期への推移に伴う画期である。縄文時代までは、戦いに関わるエヴィデンスは「埋葬された受傷遺体」のみである。これらについて、弥生時代以降を本格的な戦いの時期とみなす見解においては軽視されがちであったが、データの詳しい分析から「「けんか」の類とは意味が異なる」「縄文社会特有の戦闘行為」(内野 2013: 457)があったと積極的に評価する近年の真摯な考察は傾聴に値する。ただし、その出現比率は弥生時代に比べて有意に低いことが数量的に示され(Nakao et al. 2016、Nakagawa et al. 2017)、なおかつ、暴力文化複合の痕跡も含めて他種のエヴィデンスと共存することはない³。このことから、その多くは、ひとつのアイデンティティのもとで習俗や慣習も同じくしたグループ内での偶発的なエピソードによるものである可能性が高く、縄文時代は戦争より前の段階であったとする佐原の見解(佐原 1999)を、根本的に動かす材料や仮説は、現状ではまだ未成立というほかはない。

縄文時代のこのような状況に対し、弥生時代早・前

期には、表1に示したように、「埋葬された受傷遺体」に加え、武器の「遺骸および防御具や防御施設への嵌入」(例:福岡県新町遺跡の受傷遺体にみられる武器の嵌入:志摩町教育委員会(編)1987)や「折損・再生痕」(橋口 1992)といった行為の痕跡に加えて、「村落の囲郭」(環濠集落)、「特定の武器セット」(大陸系の磨製石剣+磨製石鏃のセット)、「武器副葬」(その副葬)からなる暴力文化複合の表象化の痕跡が、エヴィデンスとして新たに出現する。

注意しなければならないのは、これら新来のエヴィデンスは、武器の「折損・再生痕」以外のすべては弥生時代早・前期と一括したうちでも早期に顕著で、朝鮮半島から移入されたか、そこに直接の起源をもつことが、その形態の詳しい比較からも確実視されることである。したがって、藤尾慎一郎が説くように、これらのエヴィデンスは列島で自生したものではなく、外部社会の朝鮮半島からもたらされたもので(藤尾 1996)、その移入物または模倣物と判断できる。それらは、いずれも最初期の水田遺構や大陸系磨製石器などを伴う点から、朝鮮半島からもち込まれた水稻農耕文化複合のパッケージを構成する一端として伝わり、

³ 高知県居徳遺跡では縄文時代晩期ないし弥生時代早期の「遺棄された多量の受傷遺体」の検出が報告されているが、その受傷痕の一部はこの時期に存在するはずのない「鉄器」によるとされるなど、事実関係をさらに確認すべきものであるため、本稿のデータからは外している。

その先で痕跡を残したものとみなされる。

これらのエヴィデンスが完全な形で残るのは水稻農耕文化複合がじかに到来した九州北部にとどまること、それすらも独自の発展や拡充をはたした痕跡が認められないこと（寺前 2010）、および階層化や政治的統合などといった社会の複雑化が以後の500年以上にわたって顕著に進んだ形跡がないことから、弥生時代早期にもたらされた暴力文化複合は、社会に内在化されて実際の戦争として社会を変えていくまでには活性化しなかった可能性が高い。「埋葬された受傷遺体」は、表1では弥生時代前期の段階にも普遍的であるように示されているが、そのエヴィデンスの大多数は前期でも後葉から末に属するので、次に述べる第2の画期につながっていく事象とみなすべきであろう。

3 弥生時代前期／弥生時代中期の画期

第2の画期は、前期の終わりから中期に移行する紀元前400年前後に認めることができる。行為の痕跡としては、「埋葬された受傷遺体」の数や比率が九州北部で有意に上昇し（Nakagawa et al. 2017、中川ほか 2019）、近畿でも確実な例が認められるようになる。同時に、武器の「遺骸および防御具や防御施設への嵌入」と「折損・再生痕」の事例が九州北部で増加し、近畿でも、集落の入口における武器の「散乱」例（滋賀県下之郷遺跡、守山市教育委員会（編）2017）が知られる。九州北部から近畿にかけて、行為としての闘争そのものがおこなわれた痕跡が増えるのである。

暴力文化複合についても、九州北部では、朝鮮半島から新たに伝来した青銅製の剣・矛・戈からなる「特定の武器セット」が確立し、それらをもってする「武器副葬」の習俗が定着する。勇敢さや英雄性と関連した戦いのパーソナリティという表象が「武器副葬」として物質化され、個人と結びつけられるようになったのである。かたや、これらの武器はまもなく実用性を失って肥大化し、「象徴化された非実用武器」として村落の祭祀に用いられる。戦いの表象は、いっぽうでは村落を基盤とする集団のアイデンティティとも関連づけられたことになる。これ以後、九州北部では葬送の厚薄に表示される集団内の個人間格差の拡大が進むとともに、厚葬墓の数や卓越度に反映される集団間の優劣の格差も同時に進行し、弥生時代の中期後葉から後期前葉をピークとして、階層的な政治社会の形成が進んだ（寺澤 1990、中園 1991、高倉 1992）。

このような階層化の進展と併行して、九州北部で

は、平野の開発の飽和と台地上への進出（橋口 1987）、鉄器の普及（川越 1993）、集落数の増加（小澤 2002）などの事象が指摘されていることから、人口増加の下で資源や物資をめぐる緊張が高まり、集団内外での軋轢が加速した状況が推測される（中川ほか 2019）。こうした状況下で、弥生時代早期に移入されて潜在していた暴力文化複合が活性化し、軋轢の闘争化、戦いの表象を利用した集団や個人の権威の競争的拡大が促され、階層社会の形成につながった。

いっぽう、近畿や東海を中心に環濠による「村落の囲郭」が発達し、弥生時代中期の後葉には関東南部にまで広がる。これらの地方では、戦いの表象がパーソナリティとして個人と結びつけられることは少なく、もっぱら集団的なアイデンティティと結びついて環濠集落として物質化された。九州北部のような集団内や集団間の階層化は進展せず、集団相互が小闘争を繰り返し、環濠の荘厳化や打製の武器形石器など、戦いの表象を競合的に物質化して誇示することが弥生時代中期を通して続いた。こうした状況は、いわゆる pandemic war（Allen 2008、Arkush 2011）の概念で捉えうる可能性がある。資源と人口との間の緊張関係が、九州北部ほどは切迫していなかったためという仮説が、理由として提示されている（松木 1995）。

続く弥生時代後期も、戦いや戦争のエヴィデンスの基本的な構成に、全体として大きな変化はない。ただし、「特定の武器セット」が青銅製の剣・矛・戈から鉄製の剣・刀へと刷新された後は、それをもってする「武器副葬」には質量の格差が薄まり、後期の後半には、九州北部の階層的な政治社会そのものが墳墓には明確な痕跡を残さなくなる。その代わりに、鉄製の刀・剣をもってする「武器副葬」は平準化される形で一般成員に普及し、それが関東から東日本にかけて大きな広がりを見せるようになる（杉山 2008-2009）。戦いのパーソナリティを物質化して個人と結びつける権威の演出が、社会的にも空間的にも一般化した状況を示す。なお、これらの東日本の鉄製武器は、在地で生産されたもののほか、九州北部や中国・朝鮮半島で製作されたとみられるものを含んでいることから（村上 1998）、この時期以降に「武器の広域流通」が始まったとみられる。

いっぽう九州北部では、旧実用武器の青銅製の剣・矛・戈が「象徴化された非実用的武器」としてさらに発展して村落の祭祀に用いられ、近畿では「村落の囲郭」が持続、主として日本海沿いに東日本に拡大する

(森岡 1996)。このように、弥生時代後期には、「武器副葬」を媒介として戦いのパーソナリティを多くの個人と結びつけたり、「村落の囲郭」によって戦いの表象を集団アイデンティティの中心に置いたりすることが広く一般化する。すなわち、暴力文化複合が社会の規範や個人の認知に深く内在化される過程が弥生時代後期には生じていたと考えられ、そのような背景の下に、鳥取県青谷上寺地遺跡の「遺棄された多量の受傷遺体」(鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター(編)2002)が示すような大規模な殺戮行為も起こりえたと考えられる。

以上のように、弥生時代の中期から後期にかけては、早期に移入されて潜在していた暴力文化複合が、社会環境の緊張をトリガーとして活性化され、九州北部では階層的な政治社会の形成を促し、近畿では集団間の競争的関係を演出しつつ、東日本にも広がって広く深く社会に浸透して内在化された。

4 弥生時代後期／古墳時代前期の画期

第3の画期は、紀元後250年頃を境界とする弥生時代から古墳時代への移行期で、戦いや戦争のエヴィデンスの構成に大きな変動をみせる。もっとも顕著なのは、「埋葬された受傷遺体」や武器の「折損と再生痕」など、闘争という行為のエヴィデンスが減少することである。後者はこれ以後古墳時代を通じ、主として刀剣の柄を付け替えた痕跡にほぼ限られ、戦闘によって減ったり欠けたりした刃部を再生したことがわかる確実な例はほとんどない。これらのことは、実質的な闘争の機会と頻度が、弥生時代に比べて相対的に減少した可能性を示している。

これに対し、暴力文化複合のエヴィデンスはきわめて顕著となる。弥生時代以来の鉄製刀剣に鍔束や甲冑などを加えた、より豊富な内容の「特定の武器セット」が創り出され、「武器の広域流通」として近畿から各地の有力者に共有された。それをもってする「武器副葬」が、有力者の墳墓祭祀に組み込まれて急速に拡充し、なおかつその質や量には顕著かつ整然とした相互格差が示された。

そのいっぽうで、「村落の囲郭」の主体であった環濠集落がほとんどなくなり、代わって有力者「邸家の囲郭」が現れる。戦いの表象が、上記の「武器副葬」を通じて個人と関連づけられるようになるいっぽうで、集団のアイデンティティとは結びつけられなくなるのである。弥生時代に集団のアイデンティティと結

びつけられていた青銅製の「象徴化された非実用的武器」は廃棄され、個人の「武器副葬」を構成するものの中に、精製の儀仗用銅鍔(松木 1998)や鍔形石製品などとして現れる。

このように、弥生時代後期から古墳時代前期への移行においては、実際の闘争行為が減少する代わりに、戦いの表象を物質化してそれを結びつける対象が、集団から個人へとほぼ完全に集約された。これまでの研究によって、弥生時代から古墳時代の変化は、各地の有力者の間で墳墓祭祀(古墳)の共有を媒体とした政治的な連合関係が生み出され、もっとも有力な「大王」を核とする中央政体が確立したと理解されている。世界の他の地域でしばしば認められるような、征服戦争などを含む武力による統合ではなく、各地有力者間の求心的連合によって中央政体が作り上げられたことが、日本列島における先史・原史社会のユニークさと評価できよう。

実際の闘争行為の減少と、戦いの表象の物質化による有力者の威信誇示の高揚という、この画期における考古学的エヴィデンスの特異な再構成は、日本列島社会の複雑化プロセスで生じた上記のユニークさと表裏をなす。闘争行為そのものがきわめて少ない代わりに、「武器副葬」が相互に格差をもちつつ異常に発達することは、実際の闘争として競うべき武力を、墳墓築造という儀礼的競争の中に仮託したことを示すからである。弥生時代後期を通じて社会に浸透して内在化された暴力文化複合は、武力による統合の回避という特殊な状況下で、有力者個人と結びついて象徴的に表現されることに徹した。

古墳時代中期には、高句麗の広開土王碑文などが示すように、朝鮮半島で台頭しつつあった政体群との間で緊張が高まり、「武器副葬」を主内容とする戦いの表象の物質化は、それらとの競争に振り向けられる形で5世紀に最高潮を迎えた。暴力文化複合が、対外的な動機で、もっぱら象徴的局面で活性化する極に達したのである。しかし、このような動きは、6世紀の古墳時代後期に入ると収縮に向かう。

なお、これまでは比較的軽視されてきたことであるが、古墳時代のとくに前期には、卓越した古墳の中心に埋葬されるような有力者に女性も多く(清家 2018)、それらにも刀剣を中心に武器が副葬される。たとえば、墳丘の長さ86mの前方後円墳である熊本県向野田古墳では、後円部中央の堅穴式石室に収められた石棺の中に熟年女性の遺骸があり、当時の主用武

器である長刀を含む約10本の鉄製刀剣が副葬されていた。男性の有力者に比べると品目や数量は平均して限られるが、それでも向野田古墳のように質量ともに十分の武器が有力な女性に副葬される慣習が普通である事実は、戦いのパーソナリティの付与が女性に対しても普通におこなわれていたことを示す。このことは、日本列島先史段階の戦いの表象やそれが構成する世界観を復元するうえで重要である。

5 古墳時代後期／飛鳥時代の画期

7世紀の飛鳥時代には、前方後円墳は消滅するものの、古墳自体は小型化するかわら精緻化してまだ築造は続く。しかし、戦いや戦争のエヴィデンスの構成は、ここで再び大きく変化した。古墳時代の特徴であった、戦いの表象をパーソナリティとして物象化して個人と結びつける動きを反映したエヴィデンスが、ほぼ衰滅するのである。

これに代わって新たに現れるのは「城市」と「砦・監視施設」である。日本列島の城市は、同時期の朝鮮半島や中国の城市にみられるような高く分厚い城壁をめぐらせることはないが、築地塀や門で整然とした囲郭は設ける。飛鳥時代末期の藤原京で、このような城市のスタイルが確立する。「砦・監視施設」は、はるか以前の弥生時代中期と後期にはいわゆる高地性集落としてその可能性をもつものが現れるが、確実にそういう切れるものは多くなく、高地の生業に基盤を置いた通常の村落との区別はあいまいであった⁴。その意味で、砦や監視施設の性格を明確に付された日本列島最初の構造物として現れるのは、7世紀の第3四半期と第4四半期の交の頃にその中心時期をもつといわれる古代山城で、考古学的には九州北部と瀬戸内に約20基が確認されている。続く奈良時代になると、平城京が築かれるほか、これを都とする国家領域の北縁をなした東北地方に城柵が築かれる。

これらの古代山城や城柵は、戦いの表象の大きかりな物質化であるが、それまでの弥生時代や古墳時代のように、特定の個人のパーソナリティや集団のアイデンティティと結びつくのではなく、文献の記述を参照する限りでは、国家の防衛意識や領域認識を物質化したものである。古代山城は、国家が主体となった対外戦争の失敗による被侵略の危機に備えて築かれたもの

とされ、東北の城柵は国家支配のドメインを可視化して誇示したものであるといえる。このように、暴力文化複合が国家の支配イデオロギーの一翼を担いつつ物質化され始めることをもって、原史段階の終焉とみることができる。

IV 日本列島における戦いと戦争のプロセスと背景

以上4つの画期を設定して、考古資料から、日本列島の先史～原史時代における戦いや戦争がいかなるプロセスで展開したのかをあとづけた。それをまとめて結論としたい。

紀元前900年代に始まる弥生時代早期をもってする第1の画期では、大陸で生み出された暴力文化複合が、朝鮮半島を経て、水稻農耕とともに外来の情報として列島に伝わった。その後、金属器の波及や人口の増加などによって資源や物資をめぐる集団内外の緊張が高まり、暴力文化複合が活性化するトリガーを引いた。これが、紀元前400年ごろの弥生時代中期の開始をもってする第2の画期であり、暴力文化複合が単なる外来の情報から、社会に浸透してそれを動かす動機や手段へと実質化したこの時を、日本列島における戦争の始まりと評価することができる。

第3の画期は、弥生時代後期から古墳時代前期に入る紀元後250年頃に置かれ、暴力文化複合はもっぱら個人の威信と結びつけられ、有力者の武器副葬という形にほぼ集約される形となった。さらにそれは、5世紀以降の対外的緊張の高揚を梃子に、外部社会との競争媒体として意味づけられるようになった。飛鳥時代が始まる紀元後600年頃の第4の画期では、暴力文化複合の物質化は、国家支配のイデオロギーに組み込まれるようになった。

最後に、4つの画期を含めた日本列島の戦いと戦争のプロセス全体を通じて着目すべき諸点がいくつかある。まず、同等の歴史段階（複合化社会の形成段階、古典的ない方をすれば、いわゆる部族社会から首长制社会をへて国家にいたる段階）にある世界の他地域に比べ、「武器庫」「武器工房」などの武装を支える組織や、「兵営・駐屯地」「標章」などの戦団のエヴィデンスも、考古学的に皆無に等しいことである。このこ

⁴ 表1には、弥生時代中期と後期のいわゆる高地性集落の一部に「砦・監視施設」の機能があった可能性を最大限に評価して「+」を付しているが、確証は難しい。

とは、先にも述べたように、日本列島の中央政体は武力による制圧を経てではなく、ローカルな諸勢力の求心的連合によって成立した可能性が高いことと関連しよう。武力による制圧は、おのずと中央の武力の独占を生み、それがそのまま中央軍として組織される。武装を支える組織および戦団のエヴィデンスがほぼ不在であるという事実は、日本列島においては中央による武力の独占や中央軍の形成が進まなかったという特異性を反映している。

次に、「砦・防御施設」や「防御線」のエヴィデンスも薄弱であることも、同じ時期の朝鮮半島ではそれらが頻出することと比べて注意に値する。これは、日本列島が周囲を海に囲まれ、前近代の技術では侵略支配を受ける危険性が低かったことと関連しよう⁵。いい換えれば、そのような地理的孤立が、上に述べたような武力による制圧を抜きにした中央政体の確立を可能にし、それ自体の防御を固める必要度を低くしたとも理解できよう。

最後に、世界の他地域でしばしば認められる「戦争奴隷の埋葬」や「戦いにかかわる動物イメージ」のエヴィデンスが皆無であることも、日本列島の強い個性である。猛獣や猛禽のイメージで獍猛性や残虐性を演示し、敗者をそのように取り扱う傾向は、日本列島の暴力文化複合の痕跡の中には希薄である。このようなマイルドな、さらにいえば甘く穏やかな人間観が戦争にかかわる表象群に通底していることも、上記のように熾烈な征服戦争や異集団との殺戮戦を経ずに中央政体が確立した日本列島固有のプロセスによるものと考えられる。

参考文献

(日本語文献)

- 一瀬 和夫・車崎 正彦(編)
2004 『考古資料大観 4 弥生・古墳時代 埴輪』小学館。

- 内野 那奈
2013 「受傷人骨からみた縄文の争い」『立命館文學』633: 472-458。
- 小澤 佳憲
2002 「集落動態からみた弥生時代前半期の社会—玄界灘沿岸域を対象として—」『古文化談叢』45: 1-42。
- 小野 忠熙(編)
1953 『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告—』山口大学島田川遺跡学術調査団。
- 小野山 節(編)
1975 『古代史発掘 6 古墳と国家の成立ち』講談社。
- 川越 哲志
1993 『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版。
- 熊谷 公男
2004 『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館。
- 笹川 龍一(編)
1992 『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』普通寺市教育委員会。
- 佐原 真
1999 「日本・世界の戦争の起源」福井勝義・春成秀爾編『人類にとって戦いとは 1 戦いの進化と国家の形成』東洋書林、pp. 58-100。
- 2005 『佐原真の仕事 4 戦争の考古学』金関恕・春成秀爾(編)、岩波書店。
- 設楽 博己(編)
2006 『原始絵画の研究(論考編)』六一書房。
- 志摩町教育委員会・橋口達也(編)
1987 『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書7。
- 下條 信行
1986 「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開—宇木汲田貝塚1984年度調査出土石器の報告を兼ねて—」『九州大学九州文化史研究所紀要』31: 103-140。
- 下向井 龍彦
1987 「日本律令軍制の基本構造—古代における国際緊張と軍事力編成〈シンポジウム〉」『史学研究』175: 17-43。
- 杉山 和徳
2008-2009 「東日本における鉄剣の受容とその展開」『古文化談叢』60: 25-54。
- 清家 章
2018 『埋葬からみた古墳時代—女性・親族・王権—』

⁵ このことは、日本列島社会が、近代にいたるまで大陸の国家ないしはエスニック集団による侵略支配を被らなかつた歴史的事実に代弁されよう。ユーラシア大陸の反対側で鏡像的な関係にあるブリテン島が、ローマ帝国、アングロ・サクソン人、ノルマン人、デン人などの相次ぐ侵入支配を受け、いわゆる征服王朝を形成される場合があったことと比較しても、ここでいう日本列島の歴史的特質は明らかである。古墳時代についていえば、「広開土王碑文」に記された「倭軍」の渡海など、日本列島から朝鮮半島に対する軍事的侵入の微証はあるが、逆に、朝鮮半島から日本列島への軍事的侵入を示唆する文字記録や金石文はない。これは、朝鮮半島の勢力は地続きの敵対勢力から容易に侵略を受けるリスクに規制されて日本列島への軍事行動が容易でなかつたのに対し、そのようなリスクのない日本列島の勢力は朝鮮半島への軍事行動が比較的容易であったという地政的理解(下向井 1987など)とも整合する。さらに、「広開土王碑文」に記された「倭軍」とは、主として百済からの要請によって対高句麗用に派遣された武装集団であり、たぶんに「傭兵」的な性格をもち(吉田 1998)、その規模についても広開土王の業績を装飾するための誇張表現を含むという理解が、近年は一般的である。

- 歴史文化ライブラリー465、吉川弘文館。
- 高倉 洋彰
1992 「弥生時代における国・王とその構造」『九州文化史研究所紀要』37: 1-33。
- 詫間町文化財保護委員会（編）
1964 『紫雲出一香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究一』。
- 武末 純一
2002 『日本史リブレット 弥生の村』山川出版社。
- 津野 仁
2011 『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館。
- 寺沢 薫
1990 「青銅器の副葬と王墓の形成」『古代学研究』121: 1-35。
2008 [2000] 『王権誕生』講談社。
- 寺前 直人
2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会。
- 鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター（編）
2002 『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団調査報告書74。
- 豊島 直博
2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房。
- 中川 朋美・中尾 央・田村 光平・山口 雄治・松本直子・松木 武彦
2019 「弥生時代中期における戦争一人骨と人口動態の関係から一」『日本情報考古学会誌』24(1): 10-29。
- 中園 聡
1991 「墳墓にあらわれた意味—とくに弥生時代中期後半の甕棺墓にみる階層性について—」『古文化談叢』25: 51-92。
- 中橋 孝博
1993 「墓の数で知る人口爆発」『原日本人』朝日ワンテームマガジン14, pp. 30-46。
- 中村 慎一（編）
2001 『東アジアの囲壁・環濠集落』金沢大学文学部考古学研究室。
- 奈良文化財研究所（編）
2017 『飛鳥・藤原京を読み解く—古代国家誕生の軌跡—』クバプロ。
- 橋口 達也
1987 「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論集一』、岡崎敬先生退官記念事業会（編）、pp. 703-754、同朋舎出版。
1992 「弥生時代の戦い—武器の折損・研ぎ直し—」『九州歴史資料館研究論集』17: 41-61。
1995 「弥生時代の戦い」『考古学研究』42(1): 54-77。
- 橋本 博文
2007 「古墳時代の首長居館からみた古代豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』、奈良文化財研究所（編）、pp. 219-238、国立文化財機構奈良文化財研究所。
- 2012 「古墳時代の豪族居館」『講座日本の考古学 8 古墳時代 下』広瀬和雄・和田晴吾（編）、pp. 324-350、青木書店。
- 2013 「古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学 6 人びとの暮らしと社会』一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆（編）、pp. 181-195、同成社。
- 橋本 達也
2020 『巨大古墳の時代を解く鍵 黒姫山古墳』遺跡を学ぶ147、新泉社。
- 橋本 輝彦
2013 「豪族居館と大王の宮」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆（編）、pp. 116-129、同成社。
- 樋口 隆康（編）
1974 『古代史発掘 5 大陸文化と青銅器』講談社。
- 藤尾 慎一郎
1996 「倭国乱に先立つ戦い」『倭国乱の一卑弥呼の登場まで一』国立歴史民俗博物館（編）、pp. 89-93、朝日新聞社。
- 藤本 強
1988 『もう二つの日本文化—北海道と南島の文化』UP考古学選書、東京大学出版会。
- 藤原 哲
2004 「弥生時代の戦闘戦術」『日本考古学』11(18): 37-52
2011 「弥生社会における環濠集落の成立と展開」『総研大文化科学研究』7: 59-81。
2013 「古墳時代中期における軍事組織の一側面」『日本考古学』36: 15-36。
- 松本 武彦
1992 「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価—軍事組織の生成に関する一試考—」『考古学研究』39(1): 58-84。
1995 「日本列島の戦争と弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』42(3): 33-47。
1998 「前期古墳副葬鏃の成立過程と構成—雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて—」『雪野山古墳の研究 考察篇』福永伸哉・杉井健（編）、pp. 351-384、八日市市教育委員会。
2000 「戦死か刑死か副葬か？—一棺内の石製武器からみた弥生社会像—」（『瀬戸内弥生文化のパイオニア：シンポジウム 新方遺跡からの新視点』資料集、「文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会事務局、pp. 69-76）。
2007 『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会。
- 松本 直子
2018 「狩猟採集社会における戦争—集団間の暴力を促進／抑制する要因について考える—」『考古学研究』65(3): 22-36。

松本 直子・松木 武彦

- 2012 「認知考古学理論と心の先史学：神獣と古代王権に対する予察」『共生の文化研究』7 (特集号 愛知県立大学 学術フォーラム 神獣と古代王権)、pp. 19-31。

森岡 秀人

- 1990 「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」『考古学研究』43(3): 38-61。

守山市教育委員会

- 2017 『下之郷遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会。

村上 恭通

- 1998 『倭人と鉄の考古学』(シリーズ 日本史のなかの考古学)、青木書店。

吉田 晶

- 1998 『倭王権の時代』新日本出版社。

ランガム, R. & ピーターソン, D.

- 1998 『男の凶暴性はどこからきたか』山下篤子(訳)、三田出版会。

(英語文献)

Allen, M. W.

- 2008 Hillforts and the Cycling of Maori Chiefdoms: Do

Good Fences Make Good Neighbors? In *Global Perspectives on the Collapse and Transformation of Complex Systems*, edited by J. A. Railey and R. M. Reycraft, pp. 65-81. Albuquerque: Maxwell Museum of Anthropology.

Arkush, E.

- 2011 *Hillforts of the Ancient Andes: Colla Warfare, Society, and Landscape*. Gainesville: University Press of Florida.

Hamilton, V. D.

- 1964 The Genetical Evolution of Social Behavior. I & II. *Journal of Theoretical Biology* 7: 1-17, 17-52.

Nakagawa, T., Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Matsumoto, N., & Matsugi, T.

- 2017 Violence and Warfare in Prehistoric Japan. *Letters on Evolutionary Behavioral Science* 8(1): 8-11.

Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., & Matsugi, T.

- 2016 Violence in the Prehistoric Period of Japan: the Spatio-Temporal Pattern of Skeletal Evidence for Violence in the Jomon Period. *Biology Letters* 12, 20160028. (doi: 10.1098/rsbl.2016.0028)

The Process of Conflicts and Warfare in Prehistoric and Protohistoric Periods of the Japanese Archipelago

Takehiko MATSUGI*

The author divided evidence related to armed conflicts in prehistoric and protohistoric Japan into 22 categories to demonstrate the process of warfare by arranging them in chronological order. By doing so, four distinct eras were identified. In the first era (from the latter half of the 10th century BC), a violent cultural complex, that included stone weapons such as daggers and arrowheads and settlements surrounded by moats, was introduced from the Korean peninsula, together with rice paddy farming. In the second era (around 400 BC), the introduction of metal tools and a population explosion led to social disruption, triggering the warfare cultural complex. Actual battles and the perfecting of war-related items such as ritual weapons and defensive works of the settlements were developed to promote social classification and integration. Corresponding to the transition from the Yayoi period to the Kofun period around 250 AD, the third era was characterized by significant offerings of weapons in burial ceremonies of the elite to attest to their military prestige and political power. The fourth era (600 AD) was the Asuka period when fortresses were built for protection against foreign aggression and frontier rebellions demonstrated the reorganization of the warfare cultural complex, illustrative of the ideology of domination by the archaic state.

Keywords

Prehistoric Japan, Protohistoric Japan, Yayoi period, Kofun period, warfare

* National Museum of Japanese History /
The Graduate University for Advanced Studies